

カトリック 仙台教区報

2010年11月7日 No.196

発行

カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12

Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任 広報委員会

URL <http://sendai.catholic.jp/>

「教区研修会」の在り方を探る

仙台教区宣教司牧評議会

教区の重要事項について司教と共に協議するため、各県代表の信徒・司祭、修道会代表者が集う宣教司牧評議会は、毎年春分の日と秋分の日、2回開かれる。今回は9月23日(秋分の日)に、司教区センターで開催され、主に各県毎に開催される教区研修会の方向性について話し合った。

開催にあたって、平賀司教は「マサ」と挨拶した。

教区本部事務局長の小松神父

タイ5章の中に『父は正しい人にも正しくない人にも雨を降らせて下さる』とあります。神さまはいつも恵みを注いで下さるのです。その神を信頼して歩んで行く私たちキリスト者の集まりが小教区ですが、6月12〜13日の小教区代表(教会委員長)の集まりでは、様々な問題点を共有出来て良かったとの声も聞かれました。

来年の7月から1年間行われる『教区年!』では『わたしたちが教会であるということ』を4つの県の信者全体で確認し、これまでに仙台教区に注がれたたくさん恵みに感謝し、これから一緒に喜び合いながら、神さまを讃えて歩んで行くのだ!』と言うことを確認する1年にしたいのです。今日の議案は、今年度の教区研修会が中心ですが、私たちが神の子らとして、光の子らとして歩んで行ける喜びを研修会でも味わいながら、来年の『教区年!』へ向かって行ければ良いと思います。



「祝福」 仙台中央地区インターナショナルミサ9/26

次のような意見が出された。
・今まで様々な意見(研修会に対する賛否両論)がある中で開催して来た。参加して感じるのには、ただ参加すれば良いというものではなく、参加する側の姿勢も問われている。そのためには各小教区においての事前の準備が重要であると考え。さらに参加できない人のためにも開催後に小教区での研修会の分かち合いをしていただく

とより一層研修会の実りがあるように思う。

・各県からの反省で、毎回参加する顔ぶれが同じであるとの意見が出されていた。役員会では参加対象を限定しないとしていたが、参加対象を限定して開催するのも顔ぶれが変わる一つのアイデアかもしれない。

・テーマに関して、協力と成長がキーワードだと思いが、何のための成長なのか?

協力なのか? を開催通知を出す上で解りやすく説明することも大切なのではないか。

議長は、この議案について可否を問う全員一致で議案どおりの開催が可決された。あとの詳細は県ごとの連絡協議会に委ねられ、各県ごとに開催準備に入る。講師の司教とのスケジュール調整の確認がなされ、午前の部を終了した。

生命の泉

▼去る10月24日は「世界宣教の日」であった。この日のために「教会の交わりを築くことが福音宣教の鍵」と題する教皇メッセージが公表された。その中で、教会を「人生を愛する神との出会い」の場とするために、信徒にとっては神との交わりと互いの交わりの場となり、未信徒にとっては典礼や教理教育の過程と慈善・文化の過程に招かれると述べている。また、信徒は孤独と無関心に苦しむ現代の家庭に福音を土台にした新しい生き方を広めるようにと勧められている▼「真理によって立つことを標榜している教会はいくつも試練の中にあり続ける。私たちの教会は「孤独と無関心の現代に埋没しよう」としている▼宣教を信徒の使命といわれて久しい。それはこれまでの「守る信仰」から「伝える信仰」へ変わることだといわれる。しかし司牧の現場にみると、家庭の中でも信仰者は個人の信仰にとどまっているように思える。これこそ信仰の空洞化ではないか▼これまで私たちの教会は教育や福祉活動などを通して地道に息の長い宣教方法をとってきた。ところが、その場にも信徒でない後継者が多くなりつつある。また、少なくなっている司祭や修道者は管理職となつて辛うじて施設を支えているところも多い。いずれにしろこれらの施設の評価は高い。人もたくさん集まっている。ここに信徒が福音的に関わる事が出来る。これまでの地道で息の長い宣教活動は堅持されなければならない。「人間の心は動かすもなぬ、字や言葉じゃなか」モノ修道士が習った言葉という関わり方がわれわれの宣教の基本的なスタンスではないか。教皇の言われる「福音を土台にした本物の人間関係によって紡ぎだされた新しい生き方」をつくりだす場は私たちの最も身近な所に広がっている。

仙台教区年に向けて！

岩手県中央ブロック交流会

7月25日(日)、四ツ家教会に

おいて、岩手県中央ブロック交流会が開催された。司教総代理の梅津明生師を講師に迎え、二戸、上堂、志家、花巻、四ツ家の各教会から、司祭3名、修道女2名、信徒約200名が参加した。

交流会は、仙台教区年を前にその歴史的意義を理解し、意識を高めるため、①講演「函館教区120周

会という内容で行われた。

グループ懇談では「仙台教区年に向けて何をすればよいか」をテーマに話し合い、次のような意見が出された。

*「仙台教区年の祈り」を作り、ミサの前に唱える。

*歴史を振り返り、それぞれの時代の司祭や信徒の生き方から学ぶこと。

年と私の歩み」(梅津明生師) 講演の感想参照
②グループ懇談・発表

*教区年をアピールするよう染め抜いた手拭いを作成する。
*由緒ある教会への巡礼とスタンプリの企画。

*教区年の行事を通して他の教会の信徒とのつながりを深め、一体感を持てるようにしたい。

*「信仰者は今どんな社会に身を置いて生きていて、時のしるしをどう見分けるか」についての講話や、教会の外に向けての情報発信という観点から、「文化講演会」などの開催を欲しい。

さらに、仙台教区年の閉年ミサとなる「岩手県大会について、次につながるようなしつかりとした締め括りをしたいということから、次のような意見が出された。

*信者が減っている現状に目を向け具体的に動く必要がある。

*新しく教会に来た人や、洗礼を受けた人に対しては、教会になじめるよう接し方を工夫する。

*教会に來るべくして訪問する。

*教会に來にくい高齢者や障がい者などにも配慮し、御聖体をいただける環境づくりをする。

*ミッシンスクール卒業者には教会との接点を持ち続けられるよう、またバザーなどで教会に來た人々にも関心を持つてもらえるように工夫する。

*子どもたちは多忙で教会に目を向ける余裕がなくなっている。次世代をどう育てて行くか。子供の教育について考える企画や、若者だけのミサや、子どもと共にささげるミサなどがないか。

活発な話し合いから様々なアイディアが生まれた。今後これをどのように具体的にやるかが課題である。

(四ツ家教会 菅野耕毅)

梅津神父講演要旨と感想

お話は、神父様がフランス・コ・ザビエルゆかりの地(マラッカ)を旅したことからは始まり、仙台教区誕生まで年譜を追いながら説明してくださいました。1873年に禁教令が廃止になり、3年後に函館の元町教会に教会堂が建ったことや、シャルトル聖パウロ修道女会の3人の修道女が函館に來て奉仕活動を開始したことなどをお聞きしました。

また、神父様が子どもたちのころ、宮前町教会の平塚神父様と出会い、どこにでも一緒に連れて行ってもらい、結核療養所にもついて行ったことなどをお聞きし、司祭になられる原体験であったのではと想像を巡らせました。

一人ひとりに神さまの計らいがあり、1549年にザビエルが日本に上陸し、キリストを伝えたとことから、函館を経て、今、仙台教区として75周年を迎えられた事実が神の計らいを物語っていることを感じました。

許されているのはどちらか (マルコ3:4)

司教 マルチノ平賀徹夫



先日、社会司教委員会・難民移住移動者委員会主催の「道の司牧」という研修会が1泊2日で行われ、参加してきました。1日目は東京・山谷の現状の一端を見学させていただき、2日目はカトリック中央協議会で「ホームレスという状態・なぜ路上に留まるのか」という題での講演と分かち合いがありました。NPO法人代表で精神科医の森川すいめい氏による講演。「こころという視点と実態調査から見えてきたこと」が副題で、知らなかったことや気づかなかった視点からの具体的な指摘がいっぱいありました。小欄では当然書ききれないので、ほんの2・3点を紹介します。講演から感じたことをひとことでまとめたのが表題です。「安息日に許されているのは善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか」からです。総論としては「善を行い、命を救うこと」がその答えだとは、どんな人でも分かりますが。

森川氏は精神科病床数についてイタリアと日本を比較し、イタリアはゼロ、日本は32万床(今は半分に減らすことが考えられているとのこと)という現状だったことを例に挙げ、日本では「患者は見えない場所に追いやられてきた」と指摘しました。そういえば、ハンセン病の人々に対する仕打ちも同じでした。病気や障害を持っている方たちと共に生きようとするなら実際のところいろいろな難しい問題に直面するでしょうが、見えないところに排除するのでは「その人の命を救う」ことにはならないと思います。

氏は現在の生活保護について、今それは受給者に、あなた変わらなさい、という制度だとも話し、「(収入が)最低生活費に満たない者は生活保護申請ができる」が、「ルールは管理者のためにある」という指摘はグサツときました。法律や規則は大事でしょうが、管理者の都合のいいように運用されるなら人を殺してしまいかねません。氏は「民法を変えなければならない」とも言います。個人的に善意をもって助けてあげようとするときにも、その人の思いではなくこちらの勝手をルールとして押し付けてしまうことなどないでしょうか。

森川氏は、「(社会で)どんなに努力してもダメだったからホームレスになったのです。その人にさらに、努力しなさいなどと言えるだろうか。心という視点から見て人間関係を一生懸命作って行くことが大切なのかなと思う」と結ばれました。



と、仙台教区年の閉年ミサとなる「岩手県大会について、次につながるようなしつかりとした締め括りをしたいということから、次のような意見が出された。

お話は、神父様がフランス・コ・ザビエルゆかりの地(マラッカ)を旅したことからは始まり、仙台教区誕生まで年譜を追いながら説明してくださいました。1873年に禁教令が廃止になり、3年後に函館の元町教会に教会堂が建ったことや、シャルトル聖パウロ修道女会の3人の修道女が函館に來て奉仕活動を開始したことなどをお聞きしました。

また、神父様が子どもたちのころ、宮前町教会の平塚神父様と出会い、どこにでも一緒に連れて行ってもらい、結核療養所にもついて行ったことなどをお聞きし、司祭になられる原体験であったのではと想像を巡らせました。

一人ひとりに神さまの計らいがあり、1549年にザビエルが日本に上陸し、キリストを伝えたとことから、函館を経て、今、仙台教区として75周年を迎えられた事実が神の計らいを物語っていることを感じました。

(四ツ家教会 伊藤律子)

Ⅱ 心に響け、魂に響けⅡ 2010カトリック青森県の集い

2年に一度開かれる青森県のカトリックの集いが、9月5日(日)に津軽地区の黒石、五所川原、弘前の三教会の共同開催のもと弘前教会で行われ、県内各地から250人を超える信徒たちが集った。弘前では一日貸切で大きな会場を確保するのは困難であることを逆手にとり、午前はホテルニューキャッスルでの講演会、ランチタイムはそれぞれ自由に昼食をとりながらの親睦の時間、午後はカトリック弘前教会での合同ミサという、ゆったりとしたスケジュールが組まれた。

みんなの役に立つ司祭に アンドレ・ラシャペール神父



今年、私の司祭叙階金祝の年でした。

私は中学生の時、神さまに誘われたと感じています。司祭になるという考えが私に喜びと平安を与えていました。

心の中の深い平安は私の羅針盤でした。

私の召命の起源を考えると、やはりそこには共同体が働いていることが分かります。家族、小教区、教育を受けた学校、そして、その後のいろいろな出会いが私を導いてくれました。

今回のカトリックの集いのテーマは、

「Walking by Faith—信

仰でいきよう」。オバマ大

統領が就任する際に、Yes, we can というフレーズがアメリカ国民の合言葉となったように、勢いがあつてキャッチフレーズになり得るものをとということ、前向きに歩いてゆこうというニュアンスを持つこの言葉が選ばれた。元来、このフレーズはパウロのコリント人への第二の手紙、第5章7節の「目に見えるものによらず、信仰によつて歩んでいるからです」から採ったもので、午後のミサの第二朗読にも採用された。今回の集いでは、Walking by Faith という言葉

が信徒一人ひとりの心に響き、本当の意味での合言葉になつてくれたらという願いも込められていた。

午前の講演会には、東京教区多摩教会主任司祭の晴佐久昌英神父を講師としてお招きした「写真」。晴佐久神父は最近の著書『福音宣言』のなかで、天の父の愛を受けて感動したならば、今度はその感動を相手の心に響くように口に出して語り、感動を伴った福音の流れをつくろうと訴えておられる。また、その流れの源泉はあくまでも天の父であり、その感動の言葉はもつともらしく並べられた空虚なものではなく、魂に届く潤ったものだと語っておられる。したがって、目に見えるものではなく

招きにこたえて 31

で神のこたえを味わっています。日曜日にミサにあずかること

は夢のようでした。私にとつてミサは、キリストを拝領し、靈魂は恵みに満たされ、永遠の命の保証が与えられる過ぎ越しの会食でした。

私の召命の起源を考えると、やはりそこには共同体が働いていることが分かります。家族、小教区、教育を受けた学校、そして、その後のいろいろな出会いが私を導いてくれました。

私の家庭には司祭の訪問が多く、その司祭の話を聞きながら、私も司祭になりたいという気持ちが強くなりました。20歳の時、ケベック外国宣教会の司祭になることを決めました。神様に感謝しています。



心に触れるものを希求する Walking by Faith をテーマに掲げたこの集いの講演を晴佐久神父に依頼できたことは大変素晴らしいことだった。

当日の講演においても晴佐久神父は、日本で少数派のカトリック信者は信仰を表明することを遠慮しがちだが、むしろ胸を張ってすべきことなのだと主張された。ご自分の身近な経験談を交えながら「神様に助けられたという確信を堂々と語ってゆこう」と信徒を励まされた。

お昼は、久しぶりに再会した他教会の信徒同士で食事にかけた方々もあれば、弘前公園でお弁当をいただいた方々もあったようで、それぞれ自由にゆったりとした時間のなかで親睦を深めることができたようだ。

午後には、今年献堂100年を迎えた弘前教会で平賀徹夫司教主司式のもとミサが行われ、まずは、平賀司教の力強いお祈りの言葉に信徒一同も祈りの気持ちが高まった。説教では、晴佐久神父が、当日の福音のルカ第14章25〜33節との関わりの中で、「私たちにとって一番大切なもの—神様の愛—を何よりも大事にしてゆこう」と午前の講演を敷衍するかのよう強調された。また、感謝の典礼では共同祈願と奉献が組み合わされた形がとられ、奉納の一つとして、県内13の各教会の代表が教会名と献堂年が読み上げられるなか一輪ずつ花を捧げ、教会の一体感と教会の花を咲かせようというメッセージが体現された。さらに献金は、長年ハイチで活動してこられたシスター須藤(クリスト・ロア)宣教師修道女会を通して、今年1月の大地震に見舞われたハイチへ送られた。当日はシスター須藤も参加され、10月にはハイチへ戻られるというシスターからは、「皆様のお祈りに支えられているのだという確信を胸に、またハイチで頑張つて参りたい」という感慨深い言葉を頂いた。

一日のカトリックの集いを通していろいろな場面があったと思うが、その一つでも心に響き、その思い出がいっか口を突いて出てくるとすれば今回の集いは成功だったといえるだろう。(川浪亜弥子)

Ⅱ子どもと大人で、ともに祈ろうⅡ

第39回 福島県カトリックの集い

9月26日(日)に郡山市熱海町のユラックス熱海を会場にして、第39回福島県カトリックの集いが開催された。今年は『召命』をテーマにして平賀司教の講話をお聞きした。「大人が祈っている姿を子どもに見せること」、「表情としてのコミュニケーションは言葉よりもはるかに大きい」、「神はすべての人が救われて真理を知ることになることを望んでいる」、「どのような道であれ、

神の御旨を生きる。そこに福音を宣言することができ」などと、聖書の箇所や著書を上げながら、強調されていた。

その後、ミサの聖歌の練習をし、昼食の後は素晴らしい演奏に耳と心を惹かれ、そして司教主司式、共同ミサという日程であったが、今年の集いの大きな特長は、サブ・テーマ「子どもと大人で、ともに祈ろう!」神の呼びかけを思い起こそう」の趣旨を生かすために、子どもたちのプログラムが特に用意され、43名の子どもが集

に、参加者は皆、子どもたちと一緒に、ミサを心から喜んでいたし、感謝していたのだ。

昨年度は、実施一週間前になりインフルエンザの蔓延で突然中止となったが、それだけに今年度への関係者の期待は大きかった。運営についても御苦労をかけたが、新しい試みが成功して本当に良かった。

来年度は第40回の県の集いが「教区年記念の集い」と重なる。日時と会場は確保したが、中身はこれから。プログラムの中身や様々な配慮によって教区全体からできる限り沢山の方がおいでくださるよう準備を行う。

今回の準備と運営にあたった福島県南地区の皆さんに感謝。

(佐藤 大)

ハンセン病問題を考える⑦

9月11〜12日に岡山県の呂久光明園で開催された「第6回ハンセン病問題を知りたい青年交流会」に参加しました。

主催はハンセン病市民学会青年学生部会。ハンセン病問題を知るための学びと、この問題に関わる若い世代の交流を深める集まりで、学生・社会人20名程が参加しました。

療養所が島に作られたのは社会から隔離するため。

ここは風光明媚な瀬戸内海、陸まで最短でほんの30メートルですが、橋が架けられたのは1988(昭和63)年になってからです。

初日はハンセン病外科医でも

ある畑野園長のお話、二日目はお隣の長島愛生園の園内フィールドワークと、呂久光明園の入所者の方から療養所での暮らしについてお話を伺いました。特に印象的だったのは畑野園長でした。患者さんが幸せになる可能性を広げる仕事をしたと働いてきたバングラデシュや呂久光明園での経験や、ハンセン病の後遺症が末梢神経障害であることの医学的なお話。

社会復帰とは療養所の外で生活することだけではなく、後遺症などの見えるステイグマ(印)や家族との関係や社会の偏見差別などの見えないステイグマにより、自分の心の中に負い目というステイグマを持たされている人が、それを自分で乗り越えたい周囲と学ぶことでもあること。周囲も同じ問題を繰り返さないために学ぶこと。それが若い人にもハンセン病問題を知って欲しい理由のひとつであること。

元患者の皆さんが残された人生を少しでもハッピーに生きて欲しいこと。

園長には講演の後の交流会にも入所者の方と一緒に参加いただいて、長い時間語り合っていたかました。

ほっこりした人柄と、鋭い知性、個性的な生き方、この人のようになりたいと思う方でした。

(人権を考える委員会 御供 真人)



司教日程

11月12月

- 11・3 ②二本松教会殉教祭
- 5 ⑤「絹の道」試写会(東京)
- 7・8 ⑧部落差別人権委・全国会議
- 9 ④司教評議会・教区司教常務委員会
- 13 ③郡山ザベリオ学園
- 14 ④教区研修会(青森本町)
- 16 ⑤19日韓司教交流会
- 23 ④教区研修会(岩手)
- 28 ④教区研修会(八戸)
- 29 ⑤30仙台教区司教の集い
- 12・3 ③社会司教委員会
- 4・5 ⑤松木町教会黙想会
- 8・12 ⑤司教社会問題研修会
- 24 ⑤主の降誕
- 25 ⑤主の降誕

聖マリア在俗会「召命の集い」

「生き方を探しませんか」
「ひとつの生き方 道を探しませんか」のテーマで、10月10日、聖マリア在俗会は、梅津神父さまによるミサと「指導のもと」「召命の集い」を開催した。「在俗会」は、時代の要請と聖霊の働きにより奉獻生活のひとつの形として誕生。会員は、社会の一般的な生活条件のもとで生活し、一人ひとりがその置かれた場で福音の精神を生きている。参加者からは、修道会との違いや奉獻生活の具体的なあり方など、関心度の深さを示す質問が飛び交い、この集いの実りを感じ取ることができた。今後「召命の集い」を計画していこうと考えている。

(聖マリア在俗会仙台地区成田友子)

再会の喜び、信仰の歩み、希望の恵み カトリック弘前教会献堂100周年を祝って

2010年10月10日(日)、カトリック弘前教会の献堂100周年記念式典が行われ、弘前教会に関わりを持つおよそ160人の信徒が北海道から沖縄に至るまで各地から集まった。

前日の会場準備の段階から怪しい雲行きで、当日は雨模様のお天気を覚悟。しかし、嬉しい期待はずれとなつて、当日は雲間から光が差し込み、集まった信徒たちの顔も晴れやかだった。

式典は午前9時30分

から、平賀徹夫司教主司式、小松史朗神父、会津隆司神父、ジャン・ガブリ神父による記念ミサで始まった。写真Ⅱ。ミサに引き続き、そのまま弘前教会聖堂にて信徒代表成田孝夫さんの100

年を振り返つてのスピーチがあり、また会津神父のご挨拶をいただいて一同での乾杯が行われた。その後会場を隣の弘前カトリック幼稚園に移して、お弁当やデザートを戴きながら信徒同士が懇談した。また、100年を記念してのスライド上映も企画され、祝賀会は楽しさと喜びの笑顔のうちに午後



喜びの日でもあります」と言われたように、この記念式典は久しぶりの再会を果たした信徒同士が懐かしい思いで交流する良い機会だった。とりわけ、かつて三年間弘前教会に助任司祭としておられた会津神父の音頭による乾杯は、再会の喜びを噛みしめての祝杯となった。また昼食時にも懐かしい思

1時30分ごろ

閉会し

今回
の記念式典は、三つのキーワード―「再会の喜び」、「信仰の歩み」、「希望の恵み」―に集約されるだろう。

ガブリ神父が説教のなかで、「今日のお祝いの日には再会の

い出話に花が咲いた。

さらに様々なかたちで、弘前教会の100年という重い歴史に思いを馳せることができた。記念ミサの入祭の歌として100年

のきさき』を歌ったことはその一つの象徴であろう。成田さんのスピーチの中では、少年の頃の教会での侍者体験などが披露された。ラテン語のミサの様子や大斎・小斎日の順守など当時のより厳かな教会の営みが伝えられたと同時に、

その厳しさを前にしての一少年の率直な感情も吐露され、当時の様子がリアルに目の前に浮かぶようだった。またスライド上映では、ガブリ神父のユーモアあふれるトークが信徒それぞれの思い出をかきたて、写真Ⅲにあら

ちらこちからいろいろな声が上がリ、みんなで弘前教会の信仰の歩みを振り返り共有することができた。

そしてこの記念式典の日は、弘前教会の信仰の新しい歴史の第一歩、新しい一ページを刻もうという決意の日でもあった。会が終わって帰路につく信

徒たちの表情は、新たな信仰への希望に満ちあふれていた。

(弘前教会信徒会長長川浪亜弥子)

吉田昌民神父叙階金祝ミサ

10月9日(土)、仙台市宮城野区にある特別養護老人ホームパルシアの小聖堂で平賀徹夫司教主司式のもと金祝ミサが行われた。会場が狭いこともあって、梅津師、鷹嘴師、高瀬師、小松師と吉田師の親戚、吉田師とゆかりの深い信徒、パルシア入所者、職員など20人余りの参列だった。写真Ⅳ。

ミサの後、ホールでお茶会が開かれ、各自が吉田師との思い出を語り合うなど、ささやかながら和やかなひとときを過ごした。

Ⅱ 吉田神父との思い出Ⅱ

西仙台教会 猪岡光

吉田昌民師に初めてお会いしたのは、私が学生の頃である。当時は大学内にカトリック研究会があり、様々な活動をしてきた。吉田師はカトリック研究会の顧問として、またこれら全体的組織としての仙台カトリック学生連盟の指導司祭として活躍されておられた。司祭叙階から間もなくの頃であり、私たちにとっては司祭というよ



り年上の相談相手のように感じた。第17回日本カトリック学生連盟全国大会(1964年)を仙台で開催する準備に追われていた時であり、このような経験のない私たちはあたふたしていた。カトリック学生連盟の総指導司祭である粕谷甲一師や学生連盟の事務局の面々との意見交換など、たくさんの問題で悩んでいる私たちを、忍耐強く見守り、時には適切な助言で導いて下さった。その後間もなく、カトリック研究会や学生連盟も消滅したが、当時の経験は貴重で今でも役に立っており、吉田師のご指導に深く感謝している次第である。

来日50周年 感謝の式典

—オタワ愛徳修道女会—

オタワ愛徳修道女会の来日50周年を祝う式典が、9月20日、午後1時半から、東仙台教会で、たくさんの恩人、協力者が参加し、開催された。

これは、「ひたすら信頼を糧」としてというテーマで、今年1年かけて行われる同会の50周年記念のオープニング・セレモニーである。

最初に、神言会会員で名古屋の南山中高の校長である西経一神父による講演「写真」が行われた。

西神父自身、高



校3年生の宗教を教えておられるが、その豊富な教師体験に基づいた講演は、ユーモアにあふれ、聴衆が笑い転がっているうちに、大切な真理がしっかりと心に刻まれるという話術に長けたものであった。その中から、少し紹介しよう。

・中高生たちは、日替わり定食のように、変わっていく。反抗期は困ったものだと思うかもしれないが、反抗期は人間だけにあるもので、猫や犬に、反抗期はない。反抗する子どもに出

会うと、私は「がんばれ人類！」と声援を送っている。

・授業中、子どもが眠っていたとしても、その子の背景を見なければならぬ。目に見えないところを

見る。それが、訓練で身に付いていく。想像力、思いやりがあるということ、人間の尊い使命である。人間にしかない力を伸ばしていかなければならぬ。

・「ひたすら信頼を糧にして」ということを目標に、この修道会のメンバーは1年間、

神と人に奉仕をして過ごす。無償で、報いを求めずに、ただで奉仕を差し出すのである。何もお返しをするものを持たない人々への奉仕。それがこの修道会である。

・神と私は、上下関係にあるのではない。イエスが、私たちと同じ人間になってくださった。それを、私たちは愛と呼ぶ。神は、共におられる方である。私

さる方である。私たちが何かをしたから天国に行けるのではない。神にとつて、いちばん大切な宝物はあなたである。何も心配いらない。あなたがあなたなので、天国に行けるのである。神は

「お前だから、かわいい」とおっしゃっている。

休憩をはさんで、

平賀司教主司式による50周年記念の感謝のミサがささげられた。説教の中で平賀司教は50年

を記念するという聖書的意味をやさしく説き明かされた。

・時の流れは、神の恵みのうちにある。50年という節目を記念するのは、もっと大きな動機づける。それは、終わりの時、世界の完成する時が必ずやってくる。復活の時、神がすべてとなる。その時に向かって歩んでいく、それが50年の記念である。

・他の何にも心をわずらわせることなく、神の国と神の義を求めること。神の計らいのうちに、オタワ会の会員を日本に派遣してくださった神に感謝し、全



「怒りの罪」

知識を欠いているがために善意をもって誤った判断がくだされ、本人は善いことをしていると信じているのだが、ひとを苦しみに陥れてしまうことがある。知らないことを言い訳に不正義に目を閉じようとすることもある。

今年10月10日から24日までバチカンで中東シノドスが開かれた。イラク、パレスチナをはじめ中東に生きる多くの人々が暗闇の中を歩んでいる。アメリカの為政者やそれに賛同した人々が古代メソポタミア文明に始まるイラクの文化を知り、それへの尊敬をもっていたなら、「民主主義のメシア」たらんとする善意をもって、イラクに対するあれほど乱暴な軍事攻撃をすることが可能であつただろうか。あるいは、聖書に見出される「バビロンは悪」というイメージが、原理主義的なキリスト教信者らの「悪を倒そう」という気持ちを助長してしまったのだろうか。また、どれほどのイスラエル・パレスチナへの巡礼者が、イスラエル政府によるパレスチナ人に対する民族浄化政策を知り、土地、水、希望を奪われ続けている人々の苦しみに目を向け、その人々とともに祈ろうとするであろうか。そのことを知らないまま、善い巡礼であつたという思いに浸ることも多いようにみえる。

神から与えられた知性を十全に用いることの責任を思い起こし、無知にとどまろうとする怒りの罪というものを真剣に考える時が来ているように思われる。

地球を大事にする会 ドミニコ会 原田 雅樹 神父

「いのち—生と死—」

赤井 聖子

科学や医療の進歩と共に、「死」

が遠のき、「死」の現実を怖れ、「死」を否定する傾向のみが肥大している。人は自己の死について意識的・無意識的に考えないようになっている。「死」を考えるとすることは、その時までの「生」を考へることであり、生きていることの大切さと、生かされていることの尊さを考えることである。そし

員が委ねられた使命に自分をささげて生きる、これが50周年を生きる一つの意味だと思う。

て、「死」の訪れに戸惑うことがないように、自らの最後の処し方を決めておくことは、遺される家族の為に大切なことである。「その時」に対しては無力でも、その後のことについては準備できる。「生き上手」は「死に上手」と言われ、「死」の準備は「生きる」心構えでもある。また、「死」のその先にある世界を信じることは、「死」の不安を取り除くだけではなく、「死後の世界」に希望を持つこともできる。

「死」とは、終わりの時ではなく、新しい世界への旅立ちの時である。

(9月11日、北仙台教会ロゴス

研究所主催の講演会から)

「真の共生社会を目指して」 正義と平和全国集会・札幌大会

9月18日、20日、札幌市を中心に開催された。「真の共生社会を目指して」をテーマに、全国から、延べ1200名が参加した。アイヌ民族差別への抵抗の歴史を学び、3日間のプログラムを通して共生の在り方を考えた。大会に参加した仙台正平協会長渡辺清氏から報告が届いた。

第1日目は、日本聖公会北海道教区札幌キリスト教会で開会式が行われ、阿部ユボさん（北海道アイヌ協会副理事長「写真」）の基調講演「アイヌ民族抵抗運動の歴史」に耳を傾けた。

アイヌ民族は日本の先住民族として、北海道を中心に誇り高い文化を営み、豊かな自然の大地の中で平和に暮らしてきた。しかし、

近世以来、次第に異民族である日本人が移り始め、侵略を拡大したため、アイヌ民族との間で幾多の争いが生じた。

また明治時代に入り、日本政府



が領土拡張や鉱物資源などを求めて北海道に本格的に進出した。「北海道旧土人保護法」(1899年)

1997年等によって、アイヌの土地没収、収入源である漁業・狩猟の禁止、日本国氏名への強制改名、アイヌ固有の習慣の禁止、日本語使用の義務化により、アイヌ民族・アイヌ伝統文化は明治以前の平和で穏やかな繁栄から、経済的、精神的に消滅の危機に追い込まれた。

2007年の「先住民族に関する国連宣言」を受けて、日本政府もようやくアイヌ民族を「日本の先住民族」として認知し始めているが、権利回復実現の道はまだ遠い。

講演後のワークショップでは、小川早苗さん（札幌ウポポイ保存会会長）が『アイヌ神謡集』*注の朗読とアイヌ民族衣装について解説した「写真」。

小川さんは、「古い儀式用服装をていねいに見ていると、いにしえの豊かだったアイヌ文化の世界に誘われます。大祖母の時代から受け継がれてきたモレウ文様やイカラカラを私も今の時代に大切に伝承していきたい」と話された。その後、息子さんの小川もといさん

が領土拡張や鉱物資源などを求めて北海道に本格的に進出した。「北海道旧土人保護法」(1899年)



のアイヌ民族楽器のトンコリとムックリの演奏が披露された「写真」。

2日目は、5つの現地学習会と分科会が次のように開かれた。

(分科会のテーマだけでもどれほどの課題があるか理解していただけだと思います。)

現地学習会は、①アイヌ民族の歴史と文化・アイヌ女性の視点から②樺太アイヌ受難から民族の権利回復を学ぶ(江別市)③治安維持法と小林多喜二(小樽市)④レーン・宮沢事件とスパイ防止法を考える⑤小樽戦争碑巡りから憲法9条を考える(小樽市)が行われた。

分科会は、札幌市の天竺大学で①ピースゾーンを世界に無防備平和のまちづくり②労働力としての外国人と入国管理③死刑廃止と裁判員制度について④若者のデューセント・ワーク人間

らしい働き方⑤ハンセン病回復者の支援活動をめぐって、が開かれた。

夕方からは、次のネットワークミーティングが行われた。①HIV感染者への支援②憲法9条を守る③ホームレス支援④地球温暖化問題⑤憲法20条を守るう！。

最終日は、北十一条教会で、人権シンポジウム、派遣ミサ、閉会式が行われた。

「人権シンポジウム」は日本司教団社会司教委員会の主催で、これまでに仙台・名古屋・福岡で開かれてきたのに続いて札幌ではシンポジストに菊池功司教(カリタスジャパン責任者)、幸田和生司教(カリタスジャパン担当、松浦悟郎司教(難民移住移動者委員会委員長)の3司教があたり、それぞれ担当する分野で事例を発表しながら、「教会は現代社会とどのように関わるべきか」、「私たちはカトリック信者として社会とどのように関わられるか」、示唆に富んだ話を聞くことができた。

この後、派遣ミサと閉会式が行われ、主催者から、来年の全国集会は引き受ける教区がないため開かれませんが、再来年は長崎教区で行われるという発表があった。その



して、最後に、那覇教区の押川壽夫司教から日本正平協宛てに送られたメッセージが紹介された。それは、「沖縄の基地問題を考えるなら、日本各地の米軍基地はどうなのかを考えて欲しい。沖縄と連帯するなら、沖縄に来るより各地で基地撤去の集会を開いてはどうか。東京で3万人集会は開けないだろうか」というもので、社会司教委員会に諮りたいというものだった。今回の全国集会に参加して、二つのことを思った。一つは、日本が北海道と沖縄を併合することなく、北海道がアイヌ国、沖縄が琉球王国として立国していたら、どうなっていただろうかということ。もう一つは、全国各地で、大変な目にあっている人々と共に生きている仲間と出会い、話し合い、学ぶことができ、活動が続けいく勇気をもったことをありがたと思った。

*注「文字」を持たなかったアイヌ民族の口承の叙事詩「カムイユカラ」を知里幸恵さんが、言語学者の金田一京助さんから「文字」にして後世に残そうと要請を受け、アイヌ語を日本語に翻訳。『アイヌ神謡集』を1922年に完成させたが、完成の翌日知里さんは心臓発作で19才の生涯を閉じた。生地登別に「知里幸恵記念館」が建てられ、6月8日にはアイヌの人たちの主催で生誕祭が行われている。

「祈り」の分かち合い⑤

今年の年頭書簡で平賀徹夫司教は、「『祈りに心を注ぐ一年』で信仰共同体作りを」と題して、祈るよう勧めています。これを受けて、「仙台教区報」ではこの一年「祈り」をテーマに紙上での分かち合い。今回が最終回です。投稿してください。皆様に感謝。

「祈りについて」

ラ・サール会 仙台修道院

Br. クビヤス アントニオ

ある時、某宗教団体の方にお会いしました。その方は、「私たちは毎日祈っていますが、カトリックでは毎週日曜日のみ集まって祈りをするのですね」と話しかけてきました。この方がアピールしたかったのは、その団体では、毎週日曜日の礼拝の他に、日常生活の中での祈りの時間や神様と向き合う時間を大切にしているということのようです。

修道院の中でも、毎日の祈りの時間が決められていて、出来る限り実行しています。ラ・サール会の会則では修道院として共同の祈りと個人的な祈りを含めて少なくとも毎日2時間祈るように促しています。(会則73)

ラ・サール会では子供や青少年の人間の、キリスト教的な教育という使命があり、教育現場にすることが多く、毎日聖堂で共同の祈りをするのが物理的に難しいの

ですが、会則の精神は、日常生活の中で神様と向き合う時間が欠かせないことを表しています。

約300年前のことですが、創立者聖ラ・サールは普段出かける前に15分位、祈りの中で神さまの現存を思い起こし、帰ってから、神様の望みが実行されたかどうか振り返る祈りを行っていました。買い物に対しても、必要かどうか、買うことによって神様の望みを果たすことが出来るように祈っていました。

経済的に困難な状態が続いている中で、このような祈りは、節制と抑制、犠牲を促し十字架の精神に至るものではないでしょうか。

聖ラ・サールは修道士たちに、全ての出来事は信仰の目を持って見るように、全ての行いは神のみ旨が行われるように心を込めて実行するよう教えられました。

私たちの歩みの中で常にイエス・キリストが中心となるように、全世界のラ・サール会の学校・施設・修道院では、祈りの終わりに「イエズス、われらの心に生きたまえ…永遠に」という射祷を唱えます。

10年ぐらい前、メキシコで小学6年生を担任していた時の話ですが、そのクラスは、陽気で活発なクラスだったため四旬節の黙想会が出来るかどうかが危ぶまれていました。そこで黙想が実り豊かにな

るように1ヶ月前から毎日子どもたちと一緒に「この黙想会で私たちの生活を振り返ることが出来るように」との祈りを始めました。黙想会当日、陽気で活発な子どもたちも、自分なりに神さまと向き合うことが出来たようです。

大小にかかわらず、あらゆるプロジェクトの成功のために祈りが必要だということを改めて思い知らされました。

日常生活の中で祈りを中心に制限された人生の歩みの中で、イエス・キリストが私たちの行いの源となりますように、あきらめず絶えず祈りましょう。

イエズス われらの心に生きたまえ…永遠に。

「兄弟的分かち合いの中で」 教区司祭団黙想会

今年の黙想会は、9月27日の夕食から、10月2日の朝食までの6日間、盛岡の黙想の家で行われた。参加者は、例年に比べて少なく15人に満たなかった。司祭団の黙想会は、北海道の当別のトラピスト修道院と盛岡の黙想の家で、交互に開催される。トラピスト修道院では、トラピスト会の修道司祭に一日一回の講話をお願いし、盛岡でもやはり他から司祭を招いて指導をお願いしてきた。けれども、今年は、趣向を変えて参加した司祭



たちが、毎日グループに分れ、その日のミサの福音を分かち合うという新しい試みに切り替えた。

一日のプログラムは、「朝の祈り」から始まり、午前に「グループの分かち合い」を行い、その後、ミサをささげ、昼食になる。午後は、「晩の祈り」を終えて夕食になる。とにかく、この黙想会は、司祭たちが共同生活によって、兄弟的な分かち合いを体験することが目的といえよう。体の不自由な先輩の司祭たちを、若手の司祭たちがお世話をするなど、司祭団の一致と交わりを深める貴重な機会である。病気や、高齢化のためこの年の黙想会に参加できる人数も少なくなってきたので、なおさらのこと、お互いの兄弟的助け合いが必要である。(佐々木 博)

WYD2011 マドリード大会



※往復の旅費等について、金銭的な負担が大きいことから、参加者に対して仙台教区から、社会人5万円、学生10万円の援助が決定しました。ただ参加するだけでなく、巡礼という重要な経験をすることは、将来のために大きなプラスになると思います。是非、身近な青年に声をかけてください。

参加希望者はなるべく早くご連絡ください。

※参加定員は日本全体でAコース200人、Bコース100人ですが、この期間は、大学生の試験期間が終わるようので、参加者が早期に決まってしまう可能性があります。

【開催地】マドリード(スペイン)

【募集期間】2010年8月20日～2011年3月20日(締め切りが早まる可能性があります)

【日程】

Aコース 2011年8月7日(日)～8月23日(火) 17日間

Bコース 2011年8月15日(月)～8月24日(水) 10日間

【参加資格】高校生を含まない18歳以上35歳まで。

WYD2011マドリード大会の詳細は、カトリック中央協議会ホームページ内の、WYD2011マドリード大会 日本事務局公式ページをご覧ください。

なお、教区内WYDの連絡は sendai75seinen@yahoo.co.jp まで。お急ぎの電話は、仙台中央地区(舟山)まで。カトリック元寺小路教会

TEL 022 (222) 5507

各地から

福島県 いわき教会

〈夕涼みの会〉

今年の夏は、本当に暑かったですね。夕涼みの会を行った8月28日(土)も夕方になってもまだ気温が高い状態で、〈夕涼み〉とは名ばかり…でも暗くなるにつれて、暑さもおさまってきました。

信徒間の親睦、並びに普段教会にいらつしやらない家族、友達に教会を知っていただく機会として、例年は秋の(いも煮会)でしたが、今年は初めて野外での夏の行事を企画してみました。

聖堂裏のルルド前を会場とし、有志による焼そば、おにぎり、いか焼、漬物などの手作り料理、信徒の方が所属するウクレレバンドの演奏Ⅱ写真Ⅱで、



42名の皆さんと夏の夜のひと時を過ごしました。

青森県 十和田教会

19年ぶりの堅信式

ここ十和田市も7月下旬から最高気温が30度を超える日が続き、9月6日まで連日真夏日でした。その暑さも和らいで過ごしやすくなったと思ったのも束の間、9月22日からは最高気温が20度を下回るようになり秋の気配が一気にやってきました。

今年の十和田教会では、4月3日(土)の「復活徹夜祭」には、佐々木博主任司祭から4名が洗礼の秘跡を授けていただきました。ここ十和田教会においての受洗者は数年ぶりのことでした。

9月5日(日)に弘前市で開催された「カトリック青森県の集い」には、当教会から10名が参加しました。

10月3日(日)には、平賀徹夫司教様から4名が堅信の秘跡を授けていただきました。1991年8月18日に、佐藤千敬司教様をお招きしての堅信式以来でしたので、実に19年ぶりです。当日のミサでは、司教様による7つの秘跡についての



説教があり、受堅者だけでなく列席した(既に堅信を受けている)方々にも豊かな聖霊の降臨がありました。その後、堅信の秘跡が執り行われました。一人一人に按手、塗油、そして両肩に手を置かれ「主の平和」のお言葉をいただき、全身に聖霊の重みを感じ、感動の秘跡でした。今回堅信を受けた4人のうち、女性2人は幼児洗礼を受けており、男性2人は成人洗礼でした。

当教会の佐々木博神父様は毎月第2土曜と第4日曜日に、むつ市のカトリック大湊教会でミサをさ

告知板

◆マザー・テレサ生誕100年公開講演会・写真展

講師：沖 守弘氏(写真家)

講演会：2010年11月27日(土)14時～16時

写真展：11月27日(土)10時～28日(日)16時

会場：元寺小路教会

◆祈りを深めるための研修会 in 仙台「自習版」

今までに、この研修会に出席した方々を対象にした、祈りと分かち合いの集まりです。

2010年 11月23日(火・勤労感謝の日)

2011年 1月10日(月・成人の日)

3月21日(月・春分の日)

4月29日(金・昭和の日)

場所：宮城県 元寺小路教会

山形県 山形教会

福島県 ノートルダム花園町修道院

*3会場とも同一プログラム、同時開催

*参加費 無料 申込み不要

*問い合わせ 〒960-8112 福島市花園町7-7

ノートルダム修道院 津田和加子

TEL024(534)4412 Eメール：moniawaka@live.jp

◆「テゼの祈り」＝フランスのテゼ村ではじまった歌のお祈りです。短く単純な歌を何回も繰り返すことで心を合わせ、祈りを深めていきます。心静かなひとときを過ごしてみませんか。

日時：12月9日(木) 午後7時～午後8時30分

場所：松木町カトリック教会

さげています。10月17日(日)には、大湊教会の方々が当教会に巡礼に訪れ、一緒にミサに参加され、歓談されたあと、以前、大湊教会の主任司祭であった横島神父様を八戸市の塩町教会に訪ねて行かれました。また、当地には北里大学獣医学部があり、全国から学生が集まっています。この日のミサでは、侍者と第二朗読を学生が担当しました。ミサに参加された大湊教会の方は、「若い方がミサの中で役割を担うのは良いですね」と言っていました。親元を離れて生活している学生さんに、この共同体が保護者として関わり、郷里で心配している御



授けた。叙階後初めて授けた洗礼のこと。ミサにあずかった信徒たちも大きな拍手で祝福した。

宮城県

初めての洗礼

元寺小路教会

(佐々木 誠)

ケベック外国宣教会のト神父は、現在東京で日本語の勉強中だが、10月3日(日)、元寺小路教会で3人の子どもに幼児洗礼を授けた。叙階後初めて授けた洗礼のこと。ミサにあずかった信徒たちも大きな拍手で祝福した。

仙台教区年！ 2011

④弘前教会の歴史

2011年7月から始まる「仙台教区年」に向けて、仙台教区の歩みを振り返って見よう。今回は、弘前教会が献堂100周年を迎えたことを受けて弘前教会の歴史を「炬火」(たいまつ)から、探ってみた。

伝道士を連れて高岡に帰ると館の中に教会を建て自らの改宗と家臣の教化に当たったが道半ばで1608年帰天した。

息子の信枚は、1610年弘前城を築造した。家康のキリシタン禁止令が出て、京、大坂、堺のキリシタン武士71名が捕えられ弘前の地に流されると、信枚はこれを保護し親切に処遇した。信枚家紋に十字架を入れていたことから熱心な信徒であったと思われる。

◆昔、弘前は高岡と呼んで津軽の首都であった。この地にカトリックが入ったのは、フランシス・コザビエルが来日して半世紀もたない時であった。1596年、津軽藩主(津軽為信は、2人の息子と共に京に暮らしていたが、図らずも当時禁制のキリシタンに近づきことができた。次男信枚(のぶひらが洗礼を受け、続いて長男も受洗するが、若くして神に召された。為信は領国に戻ることになり、



家臣たちも教えを広めることに熱心であった。1615年、仙台からイエズス会の福者ゼロム・ド・アンゼリ師が訪れた。弘前にカトリックの司祭が訪れた最初であった。師は1623年江戸において50人の信徒と共に火刑で殉教するまで定期的に弘前を訪問していた。続いて福者ディエゴ・カルワリオ師も3度ほどこの地を訪れている。カルワリオ師もまた仙台の広瀬川で水責めにより殉教している。その後、家光の威光を恐れた信枚が棄教すると、この地からも数人の殉教者が出ているが、信仰は後に受け継がれることはなかった。

◆明治維新後初めて弘前を訪れた司祭はアリーヴェ師であった。鯉ヶ沢出身で、東京で洗礼を受けた医者からの誘いで師は、弘前に住み、フランス語の私塾をしながら布教に努め数人の信徒を得たが、

2、3年で東京に戻った。

その後、弘前は函館教区の管轄となり、司祭が函館から出張する形で布教に当たった。ヤコブ高橋豊吉氏宅を布教の拠点とし「天主公教会」の看板がこの地に初めて掲げられた。その後看板は新谷平太郎氏宅に移される。新谷家はその後も代々熱心な弘前教会の信徒で、函館教区の初日本人司祭となったトマス新谷雄三郎師を輩出している。

北部日本教区長オズブ司教が弘前を訪れた際に受洗した館山熊之進氏は、当時外国人が土地を購入することが出来なかったためフォーリ師(弘前教会の事実上の創設者)の代わりに弘前・青森・小樽・岩見沢などに土地を購入し、教区に貢献した。

今でも(昭和11年)、弘前教会を館山教会と呼ぶ人がいるほどである。



フォーリ師(写真)は、函館から弘前・青森・札幌を巡回して教務に当たったが、津軽にリンゴの栽培を伝授したことも有名である。



1894(明治27)年フォーリ師が弘前教会の司牧に当たったが、翌年フランスに帰国したので留守中、ベルリオーズ司教が代行した。

1899(明治32)年の降誕祭にモンジュ師が弘前の聖母被昇天聖堂で10名に洗礼を授け、弘前教会独自の洗礼簿を用い、司祭常駐の教会となった。「炬火」昭和11年4月号より要約、原文は文語体

クイズ 仙台教区の誕生には教皇庁の認可が必要でした。ではその時の教皇様の名前は何？

〈前回クイズの答え〉

仙台教区が誕生した昭和11年当時、現在の仙台教区内には15の教会がありました。

元寺小路・四ツ家・気仙沼・弘前・会津若松・郡山・青森現在の本町・八戸(塩町)・一関・大河原・松木町・角五郎丁(西仙台)・三本木(十和田)・白河・豊屋丁

新刊案内

神父燦燦

カトリック司祭58人に聴く
編者 カトリック新聞社／発行 教友社／定価 1200円＋税

昨年、聖ヴィアンネを司祭の模範と仰ぎ、2009年6月19日から今年の6月11日まで、教会は「司祭年」を記念した。司祭年ということで、各地で種々の企画がされたが、「カトリック新聞」紙上においては、司祭年企画として「神父燦燦」のコラムが始まった。この記事の評判は上々で、毎号のように「〇〇神父様の紹介された記事の載っている新聞が欲しい」という問い合わせもまたほどだと聞いている。

札幌教区から那覇教区まで、日本の16教区の教区司祭のみならず、修道司祭、宣教会司祭など、58人の司祭が取り上げられており、読者はそのユニークで多彩な司祭の姿に、目をうばわれる。年齢も90歳の沢田和夫神父から31歳の双子の谷脇慎太郎・誠一郎神父までの幅があり、宣教師の国籍も多様である。

仙台教区関係では、シャルル・エメ・ボルデュック神父、小松史朗神父、ミゲル・ヴァレラ神父の3人が紹介されている。日頃は、ミサの説教だけでなく、神父様方の知らない面に触れることができるだろう。

一人ひとりの司祭が語る召命の話、神学生時代の話、現在の司牧生活などを読んでみると、まるで、その司祭を知っているような気がしてくる。本書が司祭召命を呼び起こすきっかけとなることを願っている。